

旅する絵画男

卯月紺

その絵が美術館に現れたのは五月の中頃。ゴールデンウイークの特別展示も終わり、通常展示の部屋を点検していた時に見つかった。

ヨーロッパの有名な風景画とどこかの貴婦人の横顔の間、まるで最初からあったかのように展示されていた。

美青年の肖像画だ。豪華な服を着た黒髪の貴族の青年が自信にあふれた表情でこちらを見ている。きらびやかな上着もフリル付きのシャツも、一步間違えれば悪趣味になりかねないのに、彼によく似合っている。

最初に見つけた美術館職員は、慌てて館長に報告した。どこかの盗難品がこの美術館に置かれたのかもしれないと思っただからだ。

館長はその肖像画を見て首を傾げた。そして、ぼつりと

「これは……絵画男か？」

「なんですか？ 絵画男って」

「いや、最近各地の美術館の間で話題になっていて知らない間に展示されているんだ。その、美男子の絵が。しばらくすると、またどこかに旅してしまうんだが」

「いやいや。そんなことありえるんですか？」

「もうあちこちの美術館関係者から情報は着てな。それに、さっき夜間の監視カメラを見たんだが、運び込まれる映像なんてなかった」

一瞬だったんだよ。それが現れたのは。

どうやら絵画男の話は本当のようだ。

世の中には、持っていると言われるだの、中の人間が動くの様々な曰く付きの絵画が存在するがまさか絵画本体が動くものがあるとは。

「これ、どうしましょうか？」

「そのまま展示で構わないよ。絵画男があるとお客様がよく来るそうだしね」

「はい……それにしても、この絵の男、どこかで見た気がするんですよ」

「あれ？君もなのかい。私も、知ってるはずなのに思い出せないんだ。ただ……この笑顔見るとひどく腹がたつ」

「わかります。なぜでしょう？」
二人は揃って首を傾げた。

その日は館長が言った通り、普段より人が多く来ていた。特別展示がある日よりもだ。

絵画男が美男子だからだろうか、特に女性が多かった。どの女性も引き込まれるように美術館にやってきて、絵画男の前で呆然と立ち尽くす。

客が多いことは嬉しいが、困ったことも起きた。それは、とあるカップルが来館した時である。彼らはなんと喧嘩し始めたのである。仲裁に入り、訳を聞くと、原因は絵画男だった。彼女が絵画男に目を奪われたことに腹を立てたのである。

馬鹿馬鹿しいと思うが、彼らはどちらも本気だった。つまり男性の方は絵画男に本気で嫉妬し、女性の方も本気で絵画男に目を奪われていた。

このように喧嘩するカップルは他にはいなかったが、カップルや夫婦で見ると必ず目を奪われる者と、それによつ

て嫉妬する者がでてきた。

客足が落ち着いてきた夕暮れ時。美術館職員が表の掃除をしているとよく尋ねてくる老紳士と会った。

「やあ、どうも。今日は随分人が来てたようだね」

「ええ、ちよつとばかり珍しい絵が展示されたんですよ」

「ほほう。珍しいとは？」

「それがですね、『絵画男』ってご存知ですか？ 美術館か

ら美術館へ旅する美男子の絵なんです」

「なるほど……その男、年は二十歳そこそこの黒髪の青年ではなかったかね？」

「はい」

「フリルのシャツで、金の刺繍が入った青い上着の……」

「よく知ってますね！ もしかして、見たことあるんですか？」

そして、老紳士の子を見てギョツとした。普段穏やかな老紳士が顔を真っ赤にして、怒りに全身を震わせているのだ。

「その男は、昔妻の目を奪った男です！ なんでも私より

前に好きだった男に似てるとか……あの男！ 放浪している噂は聞いたがこんなところに！」

老紳士は一気にまくし立てると、見た目からは想像のつかないスピードで美術館の中に走り込んだ。

美術館職員も慌てて館長に連絡を入れて、後を追った。

「絵画男」の展示している部屋に着くと、老紳士がギラついた目で辺りを見渡していた。

「どこだ！ 絵画とはいえど、あの後、妻と喧嘩したことについて一言言わねば気が済まん！」

「ああ、この老紳士も絵画が原因で喧嘩したのか。」

「落ち着いてください。絵なら正面に……あれ！」

「絵画男」がなくなっていた。出てきた時間様に、気づかぬ間に「絵画男」があった場所は大きく空白になっていたのだ。

帰ってもらった。

本人は、

「いつか絶対に見つけてやる！」

と、いきまいていたが。

「あの絵画さ、聞いた話だと海外にも出てきたことがあるそうだよ。そこまで追いかけるつもりかな」

「さあ、どうでしょう……そうだ、館長。一つ思い出したことがあるのですが」

職員は、「絵画男」を見たときに生じた苛立ちの原因に気づいた。

「あの男、元カノの浮気相手に似てるんです。あの笑った顔……今思い出しても腹が立つ」

「私も思い出したよ。昔妻が熱を上げていた若い俳優に似てるんだ。あの頃は若かったから、ちよつと嫉妬してね」

どうも「絵画男」は恋愛ごとにおいて腹の立つ相手にことごとく似ているらしい。

そこで美術館職員は、ふと思った。

「館長、あの絵は旅をしてるなんて噂がありますが、本当は逃げてるんじゃないですか？」

あの後、怒りに震える老紳士を必死になだめ、どうにか

嫉妬に燃える男たちに切り裂かれぬように。
館長は、その意見になんとも言えない表情で笑った。

「絵画男」の行方は今もしれない。

終わり